

研究報告

【氏名】^{エイ チャン プイン} AYE CHAN PWINT

【所属】(助成決定時)熊本学園大学

【研究題目】東南アジア農村部の社会開発と日本の役割ーラオスの農村住民に対する現地調査結果を基にー

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、東南アジア農村部の社会経済開発や日本の役割に主眼を置き、ラオスの農村部を事例に農村住民の社会経済及び貧困の実態について経済的・非経済的側面から明らかにすることである。ラオスの農村部を事例にした多くの先行研究は、自然科学系、農学及び経済学系の研究が中心であり、特定のアプローチを用いて詳細に分析しているものの、経済活動に加えて、生活状況、教育状況、社会インフラの普及状況、保健医療及び乳幼児の生存状態といった非経済的な要因を含めた包括的な手法を用いながらアプローチする研究は皆無に等しい。そのため、本研究では、ラオスの農村で実施した現地調査の結果を基に、農村部の社会経済状況と貧困の実態について単なる収入と支出の側面から検討するのではなく、経済的要因に加えて、非経済的な要因を含めた包括的な手法を用いながら分析し、今後求められる対策について考察する。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、調査方法として無作為抽出法の 2 段抽出法を用いることにし、調査団体の協力の基で 2014 年 12 月にアンケート調査を実施した。村長に調査協力を依頼して質問項目を説明した後、質問票を各世帯に配布し、記入事項の確認および不明な点について聞き取りを行った。調査地域はカムムアン県ターケーク県都タム村である。カムムアン県は、首都ビエンチャンから西南に約 350km に位置し、ラオスの中南部の幹線道路である国道 13 号線が南北に走っている。また、2012 年にメコン川に橋が架橋され、タイのナコンパノムとつながっている。その他、国道 9 号線はベトナムとの国境に通じているため、2012 年以降のカムムアン県ターケーク県都への外国からの到着者数が 2012 年から 2013 年で約 10 万人増え、急激に伸びている。ターケーク県都は人(客)が到着する港という意味があり、もともと多くの人々が従来していた場所であるが、ターケーク県都から近い場所に位置するタム村でさえ、現金収入が少なく、貧しい世帯も少なくはない。

タム村は、県都ターケークから約 10km に位置する村であり、世帯数 210、人口 1,006 人の村である。村の面積は 1,513 ヘクタール、そのうち農地面積は 298 ヘクタールで全面積の約 2 割を占めている。世帯主の主な職業は主に農業であるが、世帯主が公務員の世帯では配偶者及び家族が農業を営んでいる。タム村には小学校が建設されたものの、中学校や高等学校は村から約 2 キロメートル離れている。病院やクリニックがなく、村から約 8 キロメートル離れている。調査世帯数は、村の世帯数 210 世帯のうち 196 世帯で、全数調査に至らなかったものの、村長以下村民の多大な協力

を得ることができた。調査の特色は、ラオスの主要農業生産地域に現地調査を行う点、農家のみならず非農業従事世帯も含めて社会経済及び貧困状況を明らかにする点、経済学の観点に加えて、開発経済学の観点を複眼的に検討する点、調査実施者にラオス人が含まれるため、ニュアンスの違いやインタビュアーによる言葉の誤運用を避けることができる点である。

【結論・考察】(400字程度)

タム村の教育状況(識字率)は全国より高いものの、公的教育を受けたことがない世帯主が2割を占めている。米の生産状況は、5割近くの世帯が現金収入のない自給自足型に近い農業に従事している。しかし、全体の1割を占める世帯が販売目的の生産を行っている。農業に関する資金としてタム村には村基金があり、原資は村内各世帯より一定額を積立金として徴収した額及び村への収入(行政からの補助金や村内資源への民間企業からの支払い)などが当てられる。世帯収入は、多くの世帯は収入と支出の差が僅かであり、6割近くの世帯は貯金が無いことが分かった。また、世帯収入の格差(ジニ係数)は0.34であり、収入の格差が大きいことが確認できた。国際協力機構(2010)によると、2002/2003年のラオスのジニ指数は都市が34.8%、農村は30.3%であるため、タム村の世帯収入の格差は農村の平均を上回っていることが分かる。貧困状況では、一人当たり一日1.25ドル未満で生活する貧困者世帯は148世帯で、8割近くの世帯が貧困世帯に当たる。生活インフラの普及状況は、電気が無理なく利用可能であるが、水道の普及や井戸水の質の向上、水洗トイレの普及が求められている。そのため、Japan International Cooperation Agencyによる衛生に関する様々なプロジェクトが農村開発の一環として実施されている。住宅状況は、回答者は自宅の質を良いあるいはある程度良いと評価している一方で、修理が必要だと判断している。母子保健状況では、乳児の生存状態は全国の水準より悪く、5歳未満幼児の下痢症状があった世帯が9.52%であるため、飲み水に関して井戸水を問題なく利用できるが、水の消毒方法や水の質に大きな課題があると推定できる。要するに、タム村の生活水準、母子保健状況はまだ低い水準であり、教育状況、米の生産状況には深刻な問題はないものの、教育に対する価値観の向上、高価な農薬・肥料などに対する対策が強く求められている。また、ラオスは全国的に妊産婦及び乳幼児の生存状態が悪く、特に、タム村では、乳児の生存状況がかなり悪いことが確認できた。タム村はクリニックと比較的に近い距離であるが、国レベルで母子保健医療水準が遅れているため、国家レベルの取り組みや対策が求められている。